

所報

No.143

令和6年6月13日

富山県総合教育センター

富山市高田525

E-mail: center@tym.ed.jp (代表)

URL: https://www.center.tym.ed.jp

目 次

- 巻頭言 1
- 今年度の調査研究事業の概要 2
- 今年度の研修事業より 3・4
- 海外派遣事業帰国報告 4
- 特別寄稿(片岡客員教授)・随想 5
- 連載「知って得06」 6

巻頭言

ぬかるみの荷車と仏様の指

所 長 辻 本 努



若い頃、大村はま先生の「教えるということ」(共文社、1973)を読み、いたく感動したことを覚えています。この本には、昭和45年に富山県教育委員会が開催した小学校新規採用教員研修会における大村先生の講演も収録されています。

私が感動したのは、大村先生が後に成蹊高等女学校の校長となる奥田正造先生から聞いた話として紹介されている、次のような寓話です。「仏様がある時、道ばたに立っていらっしやると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。そこはたいへんなぬかるみであった。車は、そのぬかるみにはまってしまって、男は懸命に引くけれども、車は動こうともしない。男は汗びっしょりになって苦しんでいる。いつまでたっても、どうしても車は抜けない。その時、仏様は、しばらく男のようすを見ていらっしやいましたが、ちょっと指でその車におふれになった。その瞬間、車はすっとぬかるみから抜けて、からからと男は引いていってしまった。」というものです。そして奥田先生は、「こういうのがほんとうの一級の教師なんだ。男はみ仏の指の力にあずかったことを永遠に知らない。自分が努力し

て、ついに引き得たという自信と喜びとで、その車を引いていったのだ。」とおっしゃったそうです。このことに深く感動した大村先生は、次のように述べています。「もしその仏様のお力によってその車がひき抜けたことを男が知ったら、男は仏様にひざまずいて感謝したでしょう。けれども、それでは男の一人で生きていく力、生きぬく力は、何分の一かに減っただろうと思いました。」

この部分を改めて読んで、2つのことに気づかされました。1つは、成功体験の大切さです。子どもたちに少しでも多くの成功体験を積ませることで自己肯定感が高まり、自信が生まれ、新たにチャレンジしようとする意欲や主体性が身についていくのではないかと思います。

もう1つは、「指導」と「支援」の違いについてです。「指導」とは、意図された方向に子どもたちを教え導くことであり、荷車を前から引っ張ってあげるようなものですが、「支援」とは、「支え、助けること」であり、どちらかという後ろから荷車を押すようなものではないかと思っています。そして、教師の支援は時として子どもたちからは見えない場合があります、むしろその方が子どもたちの達成感・満足感がより大きなものとなり、更なるやる気を引き出すことにつながるのではないかと思います。

令和6年度初任者研修会・新規採用教員研修会より



「初任新採研」(4月4日)
高・特・養・栄養教諭



「開講式」(4月11日)
小・中・義務・養・栄養教諭



「教員としての心構え」(4月23日)
幼稚園教諭・保育教諭

研修顧問・学力向上アドバイザー・客員教授の紹介

今年度は研修顧問と学力向上アドバイザーそれぞれ1名と、富山大学教育学部から4名の客員教授が着任されました。

研修や調査研究事業等において助言をいただくことになっております。

坪池 宏 研修顧問

片岡 弘 客員教授(代表、企画調整部)

月僧 秀弥 客員教授(科学情報部)

中川 邦章 学力向上アドバイザー

増田 美奈 客員教授(教育研修部)

和田 充紀 客員教授(教育相談部)



調査研究事業の概要

教育研修部

学んだことを生活や学習に活用する力の育成に関する調査研究(1年次)

— 算数科の授業を通して —

現在、変化が激しく、将来の予測が困難な時代を迎え、得た知識だけを使ってよりよい人生を送ることができる時代ではなくなってきています。学校教育には、目の前にいる子供たちに『何を知っているか』だけでなく、『知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか』までを視野に入れ、資質・能力を育んでいくことが求められています。

富山県においても、第3期富山県教育振興基本計画の中に「学習したことを活用し、生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていくことがますます重要」とであると掲げ、推進されています。

教育研修部では、今年度から「学んだことを生活や学習に活用する力の育成」の調査研究に取り組みます。「単元構想」「授業展開」「教材の開発」を3つの柱に取り組み中で「活用する力を育成する」授業について明らかにしていきたいと考えています。

現場の先生方の日々の授業に寄り添い、子供たちの資質・能力を育む授業づくりを考えていきたいと思っています。

算数科の授業を通して・・・



学んだことを生活や学習に活用する力の育成

科学情報部

中学校理科における科学的に探究する学習に関する調査研究(1年次)

— 生徒が自ら探究する授業づくりを目指して —

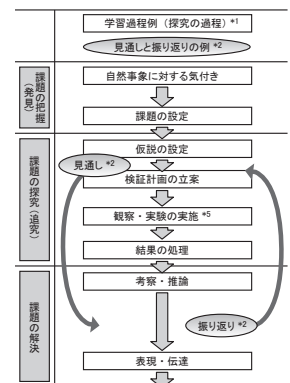
中学校学習指導要領(平成29年告示)理科編では、探究の過程が一層重視されるようになりました。富山県「令和6年度幼・小・中学校教育指導の重点」でも、中学校理科において、科学的に探究する過程を重視した学習の充実が現状の課題としてあげられ、科学的に探究する過程を重視した教育が進められています。

本調査研究は、目的を「生徒が科学的に探究する学習を進めるための教師の有効な手立てを明らかにし、探究的な学習の実現につなげる」とし、次の2点を中心に調査研究を進めていきます。

- ・科学的に探究する学習に関する教師と生徒の実態と課題を把握する。
- ・生徒が自ら科学的に探究する授業を実践するための教師の手立て(発問、授業の展開、ICTの効果的な活用等)を明らかにする。

これらより、生徒が主体となり科学的に探究する学習のための教師の手立てを明らかにし、その手立てを示した授業デザインシートの提案を計画しています。

この調査研究により、従来ある指導計画の中で、生徒が主体となり科学的に探究する授業を教師が設計できる一助となれればと考えます。



資質・能力を育むために重視する
探究の過程のイメージ
中学校学習指導要領理科編p9一部抜粋

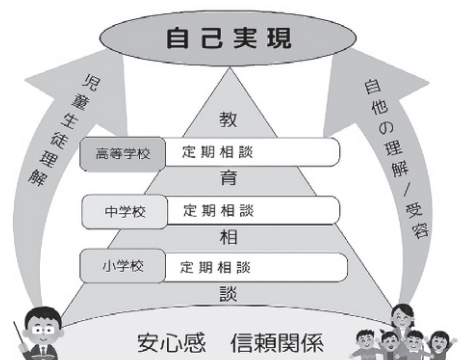
教育相談部

児童生徒理解を深める教育相談の在り方に関する調査研究(1年次)

— 定期相談に関する教師の捉えとニーズ —

学校生活の様々な場面における個別最適な支援を実現するためには、教師が一人一人の児童生徒理解を深めることが求められています。その方法の一つとして、多くの学校で行われている定期相談が考えられます。各学校で行われている定期相談に目を向けると、各学校や教師によってその実施方法や活用等については、様々であると思われます。定期相談を教師と児童生徒との関係性を築く機会の一つと捉え、児童生徒の自己実現に向けた教育相談としてよりよく機能することが必要ではないかと考えます。

そこで、本研究では、教師が定期相談をどう捉え、どのようなニーズをもっているか等の現状を把握し、その効果や課題について整理したいと思います。また、教師の児童生徒理解が深まる児童生徒との関わり方を探り、児童生徒が安心して臨める定期相談とはどのようなものかについて検討していきます。そして、定期相談における支援シート(仮称)等の支援ツールを考案し、学校現場に提供したいと考えています。



研修事業より

初任者研修会・新規採用教員研修会「教員としての自覚と使命2」

教育研修部

4月18日(木)、全校種の受講者が初めて一堂に集まりました。講義Ⅰでは、(株)よしともコミュニケーションズから講師を招き、「マナーアップで魅力づくり～社会人としての基本マナーで信頼を育もう～」と題して、お辞儀の仕方や名刺交換、電話応対、そしてやる気を引き出す言葉「ベップトーク」の手法について講義をしていただきました。学校ですぐに役立つものばかりで、受講者は互いの動作を念入りに確認していました。

講義Ⅱは、情報の取り扱いと1人1台端末の活用についての意識の向上を図る講義でした。情報の取り扱いやGIGAスクール構想等についてのクイズや1人1台端末を活用した授業の紹介を通して、情報漏洩を防ぐための注意点や、端末とクラウドを有効に活用する力をつける必要性について説明がされ、受講者は熱心に聴き入っていました。

講義Ⅲは校種別に分かれ、「学級担任の役割と学級経営」「授業の進め方」「特別支援教育の現状と課題」「年度当初の校務処理」について講義と指導助言がありました。

受講者からは「相手に失礼のない動作や言葉遣いを意識したい」「端末の新しい活用方法を模索していかなければならないと感じた」「児童が安心して楽しく過ごしていけるような学級経営を心がけたい」「授業を構想する際には生徒理解を踏まえ個に応じた指導が大切であることを再認識した」等の感想がありました。また、今年度から研修の最後に情報交換の時間を設けています。互いの悩みや他校の様子等を知ることができ、とても有意義な時間となっています。



講義Ⅰ「マナーアップで魅力づくり～社会人としての基本マナーで信頼を育もう～」



講義Ⅲ「授業の進め方」

科学情報部では、今年度もさまざまな研修を実施します。研修の一例を紹介します。

科学情報部

理科教育講座（自然観察）

学校周辺でできる観察を主に行い、自然の見方や観察の方法等について学びます。また、川原や地層の観察等では、写真や動画の撮影等、授業で活用できる教材を制作し役立てることができます。今年度は、上市町・入善町・砺波市・高岡市が会場です。全ての市町村からの参加が可能です。



トンボの観察



グラウンドの土の観察

授業におけるICT活用研修会（生成AIコース）

ChatGPT や Google Gemini 等の生成 AI を用いて、個別最適で深い学びを実現する方法について研修します。また、校務に利用し、働き方改革につなげる方法について考えます。

授業におけるICT活用研修会（ICTツール体験コース）

動画に質問や説明を追加して教材化できる Edpuzzle、グラフィックデザインアプリ Canva、オンラインホワイトボードツール Figjam 等を体験します。

ぜひ
ご利用ください



一緒に研修をつくりませんか？

学校の課題やニーズに対応した研修 ～教育相談訪問研修～

教育相談部では、学校の要望に応じて、教育相談や生徒指導に関する訪問研修を実施しています。それぞれの学校の課題に合った研修になるよう、学校とやりとりを行いながら、協働で研修をつくります。



<研修例>

【生徒指導に関する研修】

- ・児童生徒が抱える問題から学ぶ事例検討 等

【人間関係に関する研修】

- ・互いを受け入れ合う人間関係づくり 等

【教師のためのメンタルヘルスに関する研修】

- ・自分も相手も尊重しよう
～アサーティブな考え方と自己表現～ 等

詳しくは、「教職員研修実施要項」
またはホームページをご確認ください。



特別支援教育研修用動画コンテンツ

全15本

特別支援教育に関する専門性の向上と指導の充実を図るため、YouTubeチャンネルに研修用動画コンテンツを配信しています。



☞「1コンテンツ 10～20分」

→ 校内研修、自主研修などに活用できます

☞「研修用動画振り返りシート」**NEW!**

→ 理解度をチェックできます

(例)

問題1：障害のある幼児児童生徒に対して関係機関と連携し、一貫した支援を効果的に実施するために、学校が中心となって作成する計画は、次のうちどれでしょうか。

- ☐ (1) 個別の指導計画
- ☐ (2) 個別的教育支援計画
- ☐ (3) 個別支援計画

研修用動画振り返りシート「個別的教育支援計画～その基礎と活用～」より

<https://www.center.tym.ed.jp>

総教セ YouTube チャンネル二次元コード



第41回富山県高等学校生徒海外派遣事業 帰国報告

企画調整部企画課 研究主事 澤森 史世

令和6年3月4日(月)から3月15日(金)までの12日間の日程でアメリカ合衆国を訪問しました。今回の事業テーマは「オレゴン州と富山県の持続的な発展—未来を切り拓くグローバル・リーダーの育成—」。県内の高校生から団員を公募し、20名が参加しました。

オレゴン州政府教育局や在ポートランド領事事務所への表敬訪問や日本人商工会の方々との意見交換会では積極的に質問をし、見聞を広めました。

企業訪問では、海外進出している日本企業のサンクゼール、環境に配慮した靴づくりを行っているKEEN、物流の新しい形を拓くB-LINEを訪問しました。またトラベル・ポートランド(ポートランド観光協会)も訪問し、観光先進都市の取組を学びました。



KEENにて



シェルドン高校での英語劇「桃太郎」

シェルドン高校では、日本語の歌とヒップホップダンスでの歓迎を受けました。日本語授業に参加し、富山県の祭りや伝統芸能、漫画やアニメなどサブカルチャーの紹介等を英語で行いました。アメリカの高校生と一緒ににおわらを踊ったり、昔話の英語劇を披露したり、日本の縁日を体験してもらったりと、事前に班ごとに協議を重ね準備をした成果を十分に発揮しました。また、3泊4日のホームステイではホストファミリーとの思い出がたくさんできました。



個人研修についての報告

4月16日に県庁で行われた帰国報告会では、個人研修テーマについての発表を行いました。現地での環境政策やまちづくりの工夫、博物館の日米比較、ICTの利用状況と課題等、事前研修から継続して追究してきた成果を発表しました。

「理科離れ」に思うこと

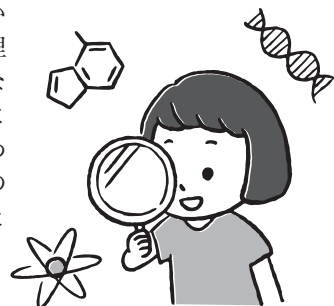
客員教授 片岡 弘

教員養成の課題は多岐にわたりますが、理科教育に携わる身としては1980年代後半から指摘されている「理科離れ」が気がかりです。国内外の各種調査でも、理科の学習に肯定的な回答をした児童生徒の割合は、年齢が上がるにつれて低下し、また諸外国に比べて日本は低下率が大きく、さらにこの傾向は成人でも維持されることが示されています。児童生徒から市民に至る科学的リテラシーの低下は、科学技術立国を謳う日本としては由々しき問題というわけです。

「理科離れ」の原因は多様ですが、公式の学習（学校教育）と日常生活の中でのインフォーマル学習との関係が重要との指摘（長沼, 2015）には説得力を感じます。以前の児童生徒は、日常生活がそれなりに不便であったため、自然に触れたり、科学や技術の進歩を直に感じる機会がかえって多くなり、それらが学校での理科の学習の強い動機付けになり得ました。つまり、学校外のインフォーマル学習と、学校での学習（理科）が密接に関連することで、理科好きの児童生徒が育っていたとの見解です。しかし、現代の若者は相対的に「文明社会の野蛮人化」（小林, 1991）しているとの主

張もあります。日常生活において、生まれたときから高度な科学技術が存在し、かつブラックボックス化して理解困難なことから、科学や技術、自然への興味関心が低下し、インフォーマル学習が弱まっているというのです。車輪の片側が失われた状況を、現状の理科教育だけでは補い切れず、理科離れが改善しないとの見立てです。

ここ数年で教育的環境はまた大きく変化しました。小学校から高校まで、1人1台端末が実現し、授業での活用は当たり前になりました。大学でも入学時からノートパソコンは必須で、データサイエンス教育がますます推進されています。この変化が「理科離れ」にどのような影響を与えるのか、よい面も悪い面も含めて様々な立場からの検証が大切であると考えています。



随想

母との約束

科学情報部長 盛本 茂

私の教員人生は支援学校からスタートし、3年後、富山南高校に異動となりました。40人の生徒との初めての数学の授業はとても緊張したことを今でも覚えています。そして、この授業でもう一つ忘れられない出来事がありました。授業後、ある生徒が質問に来たのです。内容は初歩的で「当たり前でしょ。」と言いかけてましたが、その瞬間、母との約束が思い出されたのです。その約束とは…

私に教員採用試験の合格通知が来た日のことです。喜ぶ父母とお酒を飲み、食事が終わって自分の部屋に戻ろうとしたとき、母が「話があります。」と私を座敷に呼びました。いつになく真剣な顔で母は私に言います。「茂、私は中学の時に数学が嫌いになりました。なぜなら授業後質問に行くと、先生が『なんでこんなことも分らないの!』と大きな声を上げ、教室の全員が私を見て、私は恥ずかしくて悔しくて、どうしていい分からなくなりました。あのような思いはもう誰にもしてほしくありません。ですから茂、生徒がどんな質問に来ても丁寧に答えてあげてください。もし、あなたが私と同じような思いを生徒にさせてしまったら、そのときは教職を辞めなさい。」母のその言葉に私は「約束します。」と力を込めて言いました。そして、これは生涯守っていかねばならない母との約束だと

胸に刻み込みました。

場面は前に戻ります。この母との約束を思い出し、私は質問に来た生徒に丁寧に対応しました。生徒は「分かった。そういうことか。先生ありがとう。」と笑顔で自分の席に戻りました。その後、その生徒はよく質問に来るようになり、結局、数学科に進学しました。今は県内でプログラマーとして活躍しています。もし、あのとき私が「当たり前でしょ。」という対応をしていたらどうなっていたのか、不安になります。

学校生活の中で、子供達と接していて「なぜこんなことも分らないの?」「そんな常識も知らないの?」等「えっ!」と思う場面に出くわすことがあります。でもそんな時こそ、チャンスと捉えて子供達と丁寧に対話して本人の成長に繋げることが大切なのではないでしょうか。

新年度がスタートし、約2か月が過ぎました。子供達は学校生活に慣れ、先生方とふれあったり質問や相談をしたりすることが多くなった頃だと思います。そんな時だからこそ、子供達と接するときは言葉を選び、適切な対応をして信頼関係を作ってほしいと願っています。またそこで出来上がった信頼関係が人の成長に繋がることを思うと、私たちの仕事はとても素晴らしいものだと思えて疑いません。



日本の宇宙開発と宇宙ビジネス

科学情報部 主任研究主事 佐藤 謙治

宇宙航空研究開発機構 (JAXA) は、今年2月17日に種子島宇宙センターよりH3ロケット試験機2号機の打ち上げに成功しました。この成功は、世界における日本の宇宙開発競争力を担う上で重要と考えられます (Newton, 2024 5月号)。



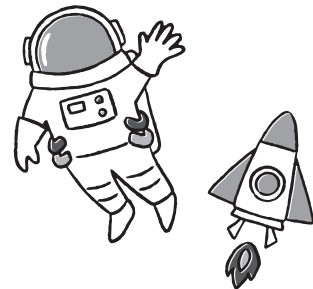
写真
H3ロケット試験機2号機の
打上げ ©JAXA

日本の宇宙開発技術は、2007年9月、月周回衛星「かぐや」(SELENE) H-II Aロケットによる打ち上げ成功や後に映画化された2010年6月13日小惑星探査機「はやぶさ (MUSES-C)」による小惑星「イトカワ」からのサンプルリターン等、実績を上げてきました。

宇宙開発は、旧ソ連の有人宇宙飛行 (1961年) や米国のアポロ計画による人類初の月への有人宇宙飛行計画 (1961年から1972年) から約60年が経過し、新たな宇宙ビジネスへと変化しています。

アメリカ航空宇宙局 (NASA) を中心に進められているアルテミス計画 (アルテミスはギリシャ神話に登場する月の女神で、アポロ計画の由来となった太陽神アポロンとは双子の関係) では、月面着陸を足がかりに民間企業が月面開発の基盤を築き、最終的には人類を火星に送る (有人火星探査) という長期的目標を掲げています。2018年2月、米国民間宇宙企業「スペースX社」(代表イーロン・マスク氏) によるテスラの電気自動車「ロードスター」の打ち上げが話題を呼びました。大型の物資輸送を可能とするロケット開発は打ち上げ後の再使用によるコスト削減がカギのようです。中国やインドも独自の開発により宇宙ビジネスへ参入しています。日本の宇宙ビジネスへの競争力を高めるために、今後10年間で1兆円の

「宇宙戦略基金」の運用が今夏にも始まると報道されています。一般人の宇宙旅行の到来はもうすぐかもしれません。



教育相談 コラム

影：人の心の奥深くに潜むもう一つの顔

教育相談部 客員研究主事 濱野 恵美

何もされていないのに「どうもあの人は虫が好かない」ということはありませんか。多くの人が持つ「嫌だなという感覚」をスイスの精神科医師・心理学者であるC.G.ユングの影 (シャドウ) という概念を使ってお伝えしたいと思います。

C.G.ユングは、人の心の中には意識と無意識があり、無意識をさらに個人の心的内容を反映する個人的無意識と、全人類が共通して持つイメージなどを普遍的無意識との二つに分けました。影とは、ある個人の意識によって生きられなかった半面であり、その個人が認容しがたく無意識化に押し込んであるもの。つまり、その人の暗い影の部分であるとしています。とはいえ、自分の影なんて、どこを見たらいいのでしょうか。河合隼雄先生は、影である自分の半面は、夢の中で自分の同性の人間として現れることが多い。また、自分の周りにいて何となく嫌いな人や、いつもはうまくいくのに、ある点だけはむやみに腹が立つ時、それが影だといっています。例えば、親は子どもに自分の影を感じ、子どもの行動や言動にやけに腹が立つことがあります。反対に特に思春期の子どもは親に自分の影を見て反発したくな

ることもあるかと思います。仲間内でも同属嫌悪という言葉は、自分の嫌な面 (影) を相手に投影した結果なのでしょう。

とはいえ、影は不快なことばかりではありません。光と影があるからこそ、生きた人間味があり、影のない人はユングの言葉を借りれば、「平坦な幻想にすぎないもの」です。影は、その人にとって不快に感じるかもしれませんが、多少辛くてもその面に直面して、「そういうものか」と受け入れたり、「何とか克服」したりすることで、影が肯定的な意味合いになってきます。影の存在を知り、受け入れることで人の心は成長していくのです。そう考えると、「虫の好かないあの人も違って見えてくるかもしれません。不快といっても、「意味のある不快さ」が影にあるのです。

〈参考文献〉
河合隼雄 「ユング心理学入門」
岩波書店 2009 86-100頁

